

事業概要書

事業名	閑上の記憶「3月11日追悼の集い」の継続開催支援事業				
開始日	2021年3月1日	終了日	2021年3月31日	日数	31日
団体名 (カウンターパート)	地球のステージ (閑上の記憶)				
担当者名	武田 絵莉香	スタッフ人数	30人		

事業費総額 (税込)	900,000 円
CF 事業枠	500,000 円
その他資金	400,000 円

事業目的	遺族や地元住民、閑上に思いを寄せてくださる全ての人々がそこに集い、同じ思いや時間を共有し、後世につなぐための場として「3月11日追悼の集い」を開催する
事業全体の概要	<p>●閑上の記憶とは</p> <p>「地球のステージ」は、「いのちの大切さ」「人権の尊さ」「世界で生きる人々のたくましさ」をテーマに、1996年1月から活動を開始しました。心療内科医であり国際医療協力の専門家である桑山紀彦が代表をつとめ、紛争地や災害地で緊急医療支援や心のケアを展開してきました。</p> <p>2011年3月11日の東日本大震災では名取市にある事務局本部が津波の被害を受け被災しましたが、直後より約2ヶ月間緊急医療支援を行うとともに6月からは約2年にわたり、主に子どもたちの心のケアを地元名取市で展開してきました。同時に2011年秋からは閑上中学校遺族会への支援も開始し、震災から1年後に閑上中学校遺族会が慰霊碑を建立。その慰霊碑を守る社務所、閑上の方たちが集える場所、震災を伝える場所として2012年4月に津波復興祈念資料館「閑上の記憶」をオープンし、資料展示や語り部活動、教育旅行や企業研修の受け入れなどを続けてきました。中でも私たちは、私たちは東日本大震災発災から学ぶ「命の大切さ、尊さ、儚さ」を語り続けてきました。聴いた方達は日々の生活で忘れがちな大切なことをそれぞれに振り返り、気づきを持ち帰ります。「もう同じ悲しい想いをする人がいないように」と語っているうちに語り部をする仲間も増えてきました。さらに他の地区でも伝承活動をする方達とは「閑上の記憶」という場所を使用して繋がってきました。全国各地でやまない自然災害、この9年で新たに「遺族」と呼ばれてしまう人も出てきましたが、その人たちの心に寄り添える施設でもあります。これは、過去の大規模災害の被災地では例を見ない取り組みであり、先駆的な活動であると言えます。その活動に全国の方々が関心を寄せてくださったおかげで、来館者は開所以降11万人以上となり、途切れることのないプログラムのお申込みを引き受け続けています。</p> <p>閑上は区画整理事業の真っ只中ですので、今後再び建物を移動する可能性も考慮し、現在もプレハブでの活動を続けています。</p>

●取り組むべき課題

震災から時間の経過と共に人々の関心は別の場所へと移り、またここ数年は日本全国で大きな自然災害が起きているため、ひとつひとつの被災地への関心が薄れつつあります。「閑上の記憶」への来館者も 2014 年をピークに年々1割から 1.5割来館者は減少し、プログラムの受け入れ数も徐々に減少しつつあります（※参考資料1）。しかし来館者の「質」は年々変わってきており『本当に知りたい人が来て、見て、聞いて』くださっていることを日々実感しています。

「閑上の記憶」という建物を利用して人と人とのつながりを大切にし、そこからまた広がるご縁をどんどん広げていくことを目的とした活動ですので、活動拠点のあり方と活用の仕方、それぞれ来館する方たちが「こんなふうに使いたい」「こんなものを置いてほしい」というアイデアを出しながら自立的に発展させていく存在を目指しています。この展開が実を結び、多くの被災地がこういった動きに賛同して、感情と記憶の整理に向き合って復興への意欲を取り戻せることができるようになればと思っています。そういった意味でも、「3月11日追悼の集い」は、遺族の思いを受け止め、誰かに繋ぎ、地域内外の人々にもう一度被災地に思いを寄せていただくきっかけとなる大切な**セレモニー**です。このセレモニーを継続的に開催することで、遺族、地域住民、そして被災地に思いを寄せてくださる方々、全国各地で被災し家族を亡くした方々をつなぎ、皆の思いを減災、防災につなげていくことができると考えています。ここで起きた悲しい出来事と同じようなことがもう二度と起こらないように、自分たちと同じ思いをする人がこれ以上増えないようにという遺族の思いや、亡くなった家族が生きた証を残すためにも多くの人々に震災の悲劇を伝えることで前に進んでいきたいという遺族の「心の復興」は置き去りの状態にあります。私たちは遺族、そして地域の人々の「心」に寄り添うための場所として「閑上の記憶」は活動し、3月11日の追悼の集いを継続して開催していくことで、遺族や地域の人々の心の復興に寄与していきたいと考えています。

ところが、昨年に続き今年もコロナウイルスは未だ終息せず、多くの人が集まるといことが難しい環境にあります。しかし、この追悼の灯火を絶やすわけにはいかないという強い思いで、私たちは今年も集いを実施することを決めました。

コロナの影響で企業研修や地域自治会の旅行、収入の大部分を占める修学旅行の受け入れもなくなったことで、運営面においても多大な影響がでています。コロナの感染予防対策を万全にするには、それなりの費用がかかりますが、だからといってこの集いを中止するという選択肢は、私たちにはありませんでした。

震災から 10 年の今年「節目の年」と言われていますが、私たちは 10 年のその先のための活動をしていけたら、という思いで、10 年目の東日本大震災の日を迎えたいと思っています。コロナによって追悼の灯火が絶えることがないように、しっかりと感染対策をして集いを実施することこそが、今私たちが遂げるべきミッションであると考えています。

●パートナー協働プログラム対象事業

新型コロナウイルスへの感染予防対策を十分に講じた上で「3月11日追悼の集い」を主催し、遺族や地域の住民たちと想いを共にする時間を作り、規模は例年よりも縮小されますが、その様子を報道機関とも密に連携をはかりながら全国に発信することで、震災の記憶を語り継ぎ、将来の防災・減災へと繋がります。

また、様々な事情で現地に赴くことのできない方のためにもライブ配信を行い、日本中どこからでも追悼の想いを共有できる時間を作ります。

●期待される効果

追悼イベントを実施することによって得られる効果には以下の4つが挙げられます。

- ①震災で亡くなった方へのメッセージを飛ばすことにより、心の整理を図る。
- ②遺族の間でのコミュニケーションを図り、交流を促進させる。
- ③参加者全員が同じ時間を共有し、11年目も共に助け合い歩んでいくことを確認する。
- ④追悼の集いへの参加を通して、心身のストレスや不満を解消、軽減することが出来る。
- ⑤コロナや様々な事情で現地を訪問できない方々にもライブ配信を行うことで、遠く離れていても想いは共有できる、ということが伝えられる。

集いの中で、亡くなった方へのメッセージを込めた鳩風船を飛ばしています。この瞬間だけは少し笑顔になれる、そんなイベントです。悲しいだけの時間を過ごすのではなく、亡くなった大切な人たちへ向けてメッセージを書くことが心の整理の時間にもなり、被災された方々にとって前へ進むための一歩にもなればという想いも込めております。

土地区画整理に伴い、閑上地区の景色が大きく変わりました。今年度新しい道路や建物が立ち、閑上の住民さんが戻ってきました。「閑上の記憶」は資料館役割の他に、被災された方々の心のケアができる場所、という大きな役割も担っています。それぞれの想いを抱えながらでもご参加いただくことに意味があると思っています。

地域外の方たちへ継続をアピールすることによって、東日本大震災の遺族はもとより、各地で起こっている災害の遺族、事故遺族、自死遺族などのつながりも広がっていきます。報道媒体を通じてこの取り組みを見た方、そしてライブ配信で参加される方々は、日常の大切さや命の大切さ、大切な人のことを想う時間にすることが減災の一つに繋がります。そのためにも、私たちはこのイベントを長く続けていくための体制作りをしていきたいと考えています。

事業内容(事業種別 (コンポーネント) ごと)	裨益者 (誰が、何人)
①「3月11日追悼の集い」の開催、運営 ・参加者が密にならないような会場配置及びスタッフの増員 ・感染予防のための消毒剤等の準備 ・来場できない方のためのオンライン配信の実施	参加者 300 名、 マスコミ 100 名

